

1, 992年の記録 (ブエノスアイレス)

1, 992年12月1日 (火)

Kさんは研修生として会社に来た。そのころ私は海外工事の設計をする部署にいたのだが、Kさんはたまたまこの部署で研修することになったのだった。

海外工事は英語で設計図や仕様書を作るため、そこにいるみんなは英語が堪能である。Kさんも勿論英語はできるが、やはり母国語であるスペイン語の方が得意だ。

彼は比較のおとなしく、言葉の問題もあって友達もなかなかできないようだったので、私はスペイン語を教えてもらったりしながら徐々に親しくなっていた。スペインの友人からの手紙をしばしば訳してもらったりした。

彼にはアルゼンチンに残してきた恋人がいた。その彼女が日本にいる彼に会いに来たのである。二人のあいだの細かいことは良くわからないが、結局は別れることになってしまった。

彼女はマリーサといって、イタリア系の女性だった。そのころ私は世田谷にいて、一度私の家に二人を招待したことがあった。食事をいろいろな話をして、私と妻は彼女と心を通わせることができた。とても優しく感じがいい人だった。

そんなこともあって、はるばるアルゼンチンから日本にやってきて、結局恋人と別れざるを得なくなってしまった彼女が、なんだかとても気の毒な感じがした。

一週間ほどでマリーサはアルゼンチンに戻り、Kさんとの間はそれで終わったようだった。

それからしばらくして、Kさんに好きな人ができた。彼の通う日本語教室の教師だった。その人がYさんだ。Yさんのことも彼から相談を受けた。仕事のこと、住むところ、お互いの家のこと、国籍などいろいろと問題はあがるが、それは本人たちが乗り越えるべきことだ。

やがて二人は結婚することになった。彼の友達を呼んで披露宴が東京で行われた。

私と妻は二人の仲人のような立場だった。アルゼンチン流なのだろう、彼の友人たちがお祝いを述べ、皆で歌ったり形式にとられない楽しく和やかな披露宴だった。

このようにして、我々はK夫妻に対して困ったことがあったら何でも相談にのってあげるような間柄になっていた。

アルゼンチンに帰ったマリーサからはお礼の手紙が届いた。発送はブエノスアイレスではなく、バイアブランカというところだった。その後一年以上にわたり数回の手紙のやり取りをして、あるときイタリアに渡るという便りをもらった。いろいろ深い事情があるようだった。イタリアに行ってから、まったく音信は途絶えてしまった。

私がKさんにブエノスアイレスに行くと言うと、彼がお父さんに連絡してくれ、いろいろ私の面倒を見てくれることになった。

ブエノスに到着したときは、お父さん自ら空港まで迎えに来てくれていた。想像していたより若いので驚いた。車で市内に向かう。ホテルに寄って荷物を置き、そこから車で5分ほどのところにあるKさんのご両親の家に招かれた。

家族のみなさんに挨拶をして、さっそく夕食をごちそうになった。家族はお父さん (65歳)、お母さん、娘さん夫婦とその子供二人だった。すしと味噌汁、ソーセージ、牛肉などをごちそうになり、いろいろな話をした。久しぶりの味噌汁がうまかった。

Kさんのご両親には子供が5人いる。長男は画家で、日本で個展をやった時は画廊のオーナーが買ってくれた2枚しか売れなかったといていた。私も招待されて画廊に行った。いい絵で気に入ったので買ったのだが高くて買えなかったと伝えた。

次男が私の友人で、今回彼の親を頼ってブエノスにきたのだ。三男がHさん、四番目が長女で婿のMさんと同居している。最後は四男で、日本に来ていて横浜で働いている。

やはりお父さんは、日本にいる次男と四男のことが気にかかっている。次男夫婦に早く子供ができれば

いいと思っているようだ。いつか彼が奥さんを連れてブエノスにきた時に、お父さんが子供のことを言ったら、奥さんは”ほしくない”というような意味のことを言ったそうだ。

従ってお父さんも半ば子供は難しいかなと思っているようだ。お父さんは次男夫婦がうまくいっていると安心している。お父さんの年金受給手続きに関して奥さんがいろいろ手伝ってくれたことについて感謝し、しっかりした良い奥さんだと考えている。

夕食を終えてMさんと夜の街に出た。車で主だった建物や施設、通りなどを案内してもらってカフェに入り、ウイスキーを飲みながら話した。1時間半くらい話して遅くなったので今日は引きあげることにした。午前2時だった。眠らない街ブエノスアイレスの夜はこれからのようだ。

1, 992年12月2日 (水)

朝9時ころにお父さんと、知り合いのAさんがホテルに迎えに来てくれた。

Aさんは10年くらい前まで観光ハイヤーの運転手をしていて、道を良く知っていて案内もできるので、同乗して僕を案内するようにお父さんが頼んでくれたのである。平日の仕事のあるときに、僕のために1日付き合っただけで案内してくれるというのだ。

まずブエノスアイレスの主な通り・建物などを車で走りながら説明してくれて、車を降りて朝食。次は少し街を歩いた。大統領府 (CASA ROSADA カサ ロサーダ) やフロリダ通りを歩く。スペインのマドリッドのようだ。建物は比較的歴史の新しい街にしては重厚なヨーロッパ的の石造りの建物が多い。

車に戻って今度はタンゴの発祥地といわれるボカ地区にある「カミニート」に行く。ここは完全な観光地だから、日本人や外国の観光客が多い。道端でバンドネオンとギターを演奏している。写真でよく紹介されている、有名なあの原色に塗られた壁の通り「カミニート」がここにある。でも、いわゆる観光地というのは見て写真を撮って終わりである。来ることができたという嬉しさはあるが、それでどうということはない。イグアスの滝などと違って、このように作られた観光地というものはそういう感じがする。

次に、車をとばしてラ・プラタ市にある博物館に行く。そこには次男の卒業したラ・プラタ大学がある。ラ・プラタ市はブエノスアイレスから約60km、車で1時間以上かかる。ラ・プラタに向かう途中のレストランでパリジャーダを食べる。3人でワインを飲み、肉の上に目玉焼きをのせた厚いステーキを食べ、2時間余りいろいろな話をした。

二人は沖縄の古謡・野村流の使い手だそうだ。Kさんが先生でAさんが弟子ということらしい。沖縄音楽の話をした。移民の国アルゼンチンではいろいろな国の人が自分の母国の芸能を披露する大会があるそうで、その大会では日本を代表して沖縄民謡をやるのだと言っていた。

休みのときは家族でゲートボール。日本ではゲートボールは老人のスポーツだが、ここブエノスの日本人の間では、子供から老人まで最もポピュラーなスポーツということだ。たっぷり2時間かけて食事して、いろいろな会話ができて楽しかった。

ラ・プラタの博物館に入る。博物館はその規模の大きさ、展示品の種類の豊富さに圧倒される。大きいものではクジラの骨や恐竜の骨。それから魚類・哺乳類・爬虫類に加えてインディオの文化に関連したいろいろなものが展示されている。ざっと一通り見て歩くだけでもかなり時間がかかる。お父さんは疲れたのか車の中で眠っていた。

ブエノスアイレスに戻りホテルに帰って一眠り、1時間半ほど眠ってMさんの電話で目を覚ました。今日もまた夜の街に繰り出す。

まずパリジャーダの食事。ここでGさんを紹介された。Gさんも沖縄の人で、26歳で結婚してすぐブエノスにきた。今は15人ほどの会社の社長である。松下とソニーのビデオ関係のメンテナンスをする会社である。Mさんはその会社の現場を任されているそうだ。Gさんはなかなか頭が切れる、ざっくばらんで気さくな人だ。食事をしながら経済のことや国民性のことなどを話した。

食事を終え、いよいよEl Viejo Almacen (エル ビエホ アルマセン) に行く。もう10時40分頃だ。El Viejo Almacen は街の中央付近の大通りに面したタンゴを聴かせる店である。本格的なタンゴを聴こ

とができることで有名だ。

まず男と女の唄う歌、そして男女の踊りを2曲づつ交代でやる。やはりプロフェッショナルの芸は迫力がある。声量もあり圧倒される。ここは狭い店で座ったのは2階席だったが、直線距離で10mもないだろう、真直に見ることができた。前座の歌手（前座といっても相当なものだが）が終わると、いよいよ真打のグループセステート登場。ピアノ・バンドネオン1、2・ヴァイオリン・コントラバス・ギターグループだ。この迫力がこれまたすごい。特にピアノはほとんど打楽器のように弾いている。アクションもさまになっていて本当にプロ中のプロという感じだ。圧倒されっぱなしだった。

ブエノスアイレスに来てEl Viejo Almacenで本場のタンゴを聴いている、何か信じられない思いだった。



演奏した曲はMano a mano (マノ ア マノ)、Que nadie sepa mi sufrir (ケ ナディエ セパ ミ スフリール)、Caminito (カミニート)、Volver (ボルベール)、A media luz (ア メディア ルス)、La Cumparrita (ラ ンバルシータ) など有名な曲が多かった。本当に感慨深く、感激で胸が熱くなった。

演奏と歌は2時間半も続いて、午前1:00ころ終わった。

それからカラオケだ。自分としてはもう夜も遅いし疲れていたもので、できればもう解放して欲しかったのだが、せっかくの好意なので甘えることにした。ブエノスには5、6件軒日本人用にカラオケがあるらしい。カラオケバー「SIAWASE」は女性が6、7人いる。曲は時々新しいものもあるが、ほとんど古いものだ。レーザーディスクではなくテイチクのビデオだった。店の女性は客が歌っているのを聴いて一生懸命に覚えようとしている。しかし日本語の歌はあまりうまく歌えないようだった。やはり自国語の歌でないと難しいのだと思う。時々スペイン語の歌が歌われるが、ほとんどが日本で知られているメキシコの曲キサス・キサスとかラ・ウルティマ・ノーチェ、エル・レロー（時計をとめて）などだ。もっともカラオケは日本人のためのものなので、日本人が歌えるものでないといけない訳だ。

途中でアルゼンチン人が入ってきてスペイン語で1曲歌ったが、やはり雰囲気が合わないらしく、すぐにいなくなってしまった。

こちらがリクエストをしても無いらしく一向にリクエストはかからない。全くリクエストには関係なく古い曲ばかりがかかる。時々歌の意味をブエノスの女性に説明しなくてはならない。

「さざんかの宿」の歌の意味を説明していて、自分でも何だか面白かった。かなわぬ恋を女性の側から歌った曲で、題名はそれを象徴的にいっているということがなかなか伝わらない。最後には絵に描いて身振り手振りで説明した。

GさんとMさんがいろいろ気を使ってくれて、楽しませてくれた。

今日はとうとう午前3時過ぎになってしまった。ホテルに送ってもらい、シャワーを浴びて床についたのは午前4時を回っていた。ブエノスではこれが普通なのか？

1、992年12月3日（木）

次の日の朝、お父さんが9時にホテルに迎えに来てくれ、2日分のホテル代まで払ってくれた。申し訳なくて仕方なかったが、ありがたく好意を受けさせていただいた。

お父さんの家に行って改装したキッチンの写真（これは次男に見せて欲しいとのことだった）と、玄関の前で写真を撮った。この写真は日本からブエノスに送ろう。

お世話になった家族の皆さんにお礼とお別れの挨拶をして、お父さんに車で空港まで送ってもらった。一切の面倒見てもらった上に、土産にコーヒーとお菓子までもらってしまった。元気で仕事を続けられること、日本に来たら是非寄っていただきたいということを伝えて別れた。日本には3、4年後孫たちを連れ

て行くつもりだと言っていた。空港に向かう車の中で、「息子の相談相手になってやってください」「彼はあまり話がうまくないので、友達ができないと思いますから宜しくお願いします」と頼まれた。

お父さんも、遠く日本にいる息子のそのあたりを心配しているのだ。彼が父に電話で、私にいろいろと世話になったことを伝えている。だからお父さんも私に彼の相談相手になって欲しいと思い、この2日間一切の面倒を見てくれたのだった。言われなくても、彼の相談相手になるつもりでいたので、お父さんにそのことを伝えた。彼には心配事や悩み事があったら、何でも相談して欲しいと伝えよう。

旅はやはり観光だけではつまらない。Kさんの家族、Aさん、Gさんに遭えて本当に良かった。お父さんは実直で本当に良い人だった。今は感謝し、今度お父さんが日本に来た時にはできる限りのお返しをしたいと思う。

【追記】

1. その後、Kさん夫婦にはリナちゃんという女の子が誕生した
2. その後、Kさんのお父さんは孫を連れて日本に来ていない